

うちのゆっくりれいむが風邪を引いた。

「ゆう……ゆう……」

部屋の隅に置いた段ボールの中で、小さな声を漏らしつつ、ふくらんだり縮んだりしている。

覗いてみると、額にうっすらと汗をかいて、目を閉じていた。まるまるとした体（頭？）が、心なしか扁平につぶれている。

頬が桃のようにうっすらと赤い。

手で触れると、蒸籠から出したての饅頭のように、熱かった。普段はさらさらと乾いているはずの頬も、汗でぬめっている。

「ゆ……？」

薄目を開けたゆっくりが、挨拶しなければいけないと思ったのか、小さく言った。

「ゆくり、してて、ねっ」

舌足らなくなっている。ふう、ふう、と浅い息を繰り返す。

頬をぺたぺたと撫でて、おまえこそゆっくりしなさい、と言い聞かせた。

ゆっくりは苦しそうに顔をしかめて、もそ、もそ、と伸び上がった。

ジャンプしたつもりなのだろう。だが地面から離れることもできない。

「ゆう`う`……」

と、うめいたかと思うと、ぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「つらいよお、頭ががががするよお……」

ゆっくりできないよお……

おねがい、たすけてね……」

昨日湿ったまま扇風機の前で寝てしまったからだ、と言い聞かせた。水浴びをしたら、すぐタオルにくるまって、乾かさなければいけない、それでなくてもこの季節、カビたり腐ったりしやすい、気を付けなさい、おまえは饅頭なのだから。

「ああん、あたみたいよお……」

いたくて死にそうだよお……

れいむ、しんじょうよ……ああん、ああん」

説教は、どうやら届かなかっただらしい。斜めにぐったりと潰れて、ゆっくりはぐずぐずと泣き始めた。

持ち上げる。見た目だけではなく、手触りもいつもより緩い。たゆたゆした健康的な柔らかさではなく、皮が削れて薄くなってしまったような、危うい柔らかさだ。

腕の中で、ねろんっ、と横に伸びた。ちょっと乱暴にしたら、すぐ破裂してしまいそうだった。

光のないうつろな目をして、息を荒げたまま、つぶやくように言う。

「だっ、だめだからね……」

れいむ、やぶれちゃうから……

おちたら、しんじょうから……

ゆっくり下においてね……！

おねがいだからね……！」

身の危険を感じたらしく、力なく体をもぞつかせる。朦朧としてしまい、相手がわからないのだ。もちろん、腕の中から逃げ出すほどの力もないのだが、懸命さはひしひしと伝わってきた。

箱に戻して、買い置き冷えピタをおでこに貼ってやった。「ゆっ！」とがすかにつぶやいた。

気持ちいいのかどうか、数回聞いてみた。四度目にやっと、こくりと小さくうなずいた。

いつもなら冷えピタを貼ると非常に喜ぶのだが、今夜はその余裕もないらしい。

葛根湯をスプーンで口に入れても抵抗しなかった。苦味までわからなくなっていた。

心配になったので、いっしょに寝ることにした。

枕の横に置いて、明かりを消す。

横になると、耳のそばで「ゆう……ゆう……」と苦しい寝息が聞こえた。髪に鼻を埋めてみた。普段、砂糖の甘い匂いのするゆっくりの髪は、少し脂じみて辛い匂いがした。

ぶるぶるっと震えて、寝言ともうごとともつかないつぶやきを漏らす。

「あつい……さむいよお……」

ゆっくりしたいよお……」

バスタオルを取って、かけてやった。裾を丁寧に頬の下に入れ込んだら、泥棒の頬かむりのような姿になった。

十分ほど様子を見たが、それでも寒気は収まらないいらしかった。がたがたとひっきりなしに震えている。

仕方がないので、抱きしめてやった。ゆっくりは「ゆぐ……」とうめいたが、もぞもぞとこちらの胸に顔を押し付けて、びったりとくっついた。熱い息が夜着越しにふうふうとかかった。

その夜はずっと、ゆっくりを見てやった。暑がってバスタオルをぶるぶると振り落とす都度かけなおし、二度も冷えピタを貼り替えてやった。こちらが眠ってしまうと、寝ぼけて踏み潰すおそれがある。だから寝ることもできなかった。

できなかったはずなのだが、いつの間にかうとうとしてしまった。はっと目を覚ますと、窓の外が明るくなり始めていた。どこかでカラスが鳴き始めた。

ゆっくりはまたしてもバスタオルを振りほどいていた。くしゃくしゃになった汗ばんだタオルにうずもれて、寝汗で前髪を張り付かせ、眠っている。髪に手をからめてゆっくりと撫でていて、あることに気づいた。

耳障りな寝息が聞こえない。落ち着いた、静かな呼吸が続いている。そういえば、こころなしか熱も下がったようだ。安心したので、そっと持ち上げて段ボールに戻した。

日が昇ってから起きだして、食事を作っていると、「ゆっ！ゆうっ！」と大きな声が聞こえた。

段ボールを見に行くと、夢から覚めたようにきょとんとした目で、ゆっくりが見上げていた。こちらの顔を見ると、ようやく安心したようにいつもの得意げな顔になって、「ゆっくりして行ってね！」と言った。

もういいのか、と具合を尋ねた。

「うん、れいむげんきになったよ！

おねつさがったし、さむいのもなくなったよ！」

ばふばふ、と二度ほど跳ねた。わずかだが、確かに離陸していた。

「れいむ、おなかすいたな！

ゆっくりたべさせてね！！！」

ほんの六時間前には死にそうなほどぐったりしていたのだから、無理してはいけない、最初はおかゆにしなさいと言いつたが、ゆっくりは聞かなかった。おかゆどころかホットケーキがいいと言いつた。

おかゆにすると繰り返すと、不意にゆっくりはあの、ジト目で口を尖らせた非常に不愉快な表情になって、つぶやいた。

「れいむ、とつてもつらかったのに、おいしいものもくれないんだ」

抱き上げて、ゆふゆふと軽く揺さぶりながら、台所に連れて行った。まだ中身がぼさぼさした感じで弾力に乏しかったが、皮の厚みは戻りつつある気がした。

テーブルにゆっくりを置いて、鍋に向かった。小鉢におかゆを取って、塩を振り、みつばを乗せた。

それを持って、ゆっくりと向かい合わせに腰掛けた。ふー、ふー、と顔に向かって湯気を吹き流してやると、表情がみるみるほぐれ、薄く開けた口によだれを貯め始めた。

香りに気を取られてぼかんとしているゆっくりの前に、よく覚ましたおかゆをスプーンで差し出した。反射的に、ゆっくりがスプーンにかぶりついた。

「あむっ！ も〜ぐも〜ぐ.....」

ばあっ、と明るい顔になって叫ぶ。

「おいしーい」

一口でホットケーキのことは念頭から消えたらしい。その後も次々とスプーンにかぶりついて、一皿空けてしまった。

「もっとほしいよ！ ゆっくりおかわりちょうだいね！」

病み上がりなのにそんなにたくさん食べてはいけないと言いつたが、もちろん聞き分けなかった。

「ゆっ？ れいむはもうびょうきじゃないよ！ いっぱい食べてもだいじょうぶだからね！」

なおもそう要求するゆっくりを抱いて、縁側に行き、腰を下ろした。顔の高さまで持ち上げて、何度も頬ずりする。

むにむに、すりすりと言いつているうちに、何かが伝わったらしく、「ゆ.....」とゆっくりが身動きした。

不意に、むにと自分から頬を押し付けて、言った。

「いっぱいありがとうね！ 今度はゆっくりしてね！！！」

ようやく、少しは報われた気になった。

縁側にゆっくりを置いて、寝室に向かった。戸を締めて横になろうとすると、もぞもぞがたがたと戸をこじ開けて、ゆっくりが入ってきた。

「いっしょにゆっくりするね！！」

そういうわけで、再び胸の中にゆっくりを収めて、昼寝することになった。ゆっくりは時おり楽しげに「ゆ」「.....ゆっ！」と寝言を漏らし、ほんのり冷たく柔らかくなっていた。すっかり回復した様子だった。

その日の午後遅くまで、ゆっくりとゆっくりした。

- ゆっくりよかったね！ -- 名無しさん (2009-07-14 22:41:36)
- やっぱゆっくり可愛いけど、飼い主もゆっくり想いですな -- 名無しさん (2010-03-21 02:51:33)
- 風邪はつらい。 -- 名無しさん (2010-11-27 14:34:06)

名前:	<input type="text"/>
コメント:	<input type="text"/>

投稿